

令和 6 年 4 月 18 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12616

研究課題名(和文) ソーシャルメディアの広がりとジェンダー規範の形成に関する研究

研究課題名(英文) The rise of social media and the construction of gender and sexuality norms

研究代表者

田中 洋美 (Tanaka, Hiromi)

明治大学・情報コミュニケーション学部・専任准教授

研究者番号：70611739

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ソーシャルメディアによりジェンダーに関する差別・抑圧の解消のためのいかなる機会とリスクが生まれているのかを検討した。またソーシャルメディアを含む形でのジェンダーとメディア研究の再構築も目指した。性差別に批判的な言説の形成と個人のソーシャルメディアの利用実践を検討した結果、ソーシャルメディアには社会的弱者のエンパワーメントを促す反面、人権侵害や暴力の温床にもなっていることがわかった。問題解決には、ソーシャルメディアを捉えた新たなメディアリテラシーの構築と利用者間の意識啓発、そしてプラットフォーム事業者を含む様々なステイクホルダーの間の対話と協働が必要であることもわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ソーシャルメディアという急速に普及した新たなメディアに焦点を当て、そのジェンダー分析を行い、従来のジェンダーとメディア研究を再構築するモノである。もはや日常生活において不可欠となったソーシャルメディアを理解し、それにまつわる問題解決を考える上で有益な知見を提供している。

研究成果の概要(英文)：This study examined which opportunities and risks have emerged from a new media ecology involving social media. It also aimed to reconstruct gender and media studies which have long developed with a strong focus on traditional mass media. The study focused on (1) digital activism such as #MeToo and a formation of critical discursive spaces on social media and (2) women's visibility practices on social media, particularly their self-representational practices and subjectivities. It revealed that social media is ambivalent in its effect: while it contributes to empowerment of marginalized groups such as women and minorities by giving them "voice" and increasing their visibility, it facilitates violence and harms against them. The study stresses the importance of elaborating social media literacy and promoting more dialogues and collaboration among various stakeholders including platform companies.

研究分野：社会学、ジェンダー研究、メディア研究

キーワード：ジェンダー メディア ソーシャルメディア デジタル技術 人工知能

1. 研究開始当初の背景

1970年代にシリコンバレーで開発され、その後20年ほど時間をかけて一般に普及していった新しい情報通信技術は、1990年代以降インターネットを基盤とする新たなコミュニケーションをもたらしてきた。2000年代終わりにはスマートフォンが発売され、ソーシャルメディアという新たなメディアが登場したが、今やその影響は広範囲に渡っており、社会の在り方を根本的に変えつつある。とりわけ、マスメディアが中心であった従来のメディア環境において比較的是っきりしていた送り手と受け手の間の境界や対人コミュニケーションとメディア化されたコミュニケーションの間の境界が流動化したことは、大きな変化である。

スマートフォン(iPhoneの発売は2007年、日本では2008年)やそのOS上で操作可能なソーシャルメディア・プラットフォームに関する技術やサービスの大半は、2010年代以降に大きく発展した。そのため、それらに関する学術研究の歴史も比較的新しい。また、ソーシャルメディアにはジェンダーに関する現象や問題が多々あるものの、ジェンダー分析を中心に据えたソーシャルメディアの研究は決して多くない。

研究代表者は、以前にも雑誌、漫画、広告等のメディアを対象にジェンダー分析を行ってきた。本研究では、その問題意識をソーシャルメディアに広げ、その普及がジェンダーの社会関係をどのように変えているのかを明らかにしようとした。

2. 研究の目的

本研究では、近年ソーシャルメディアが広がりメディア環境が変化する中で、ジェンダーやセクシュアリティに関する差別や抑圧の問題の解消のためにいかなる機会とリスクが生まれているのかを考察した。新たなメディアの利用拡大が社会のジェンダー秩序にいかなる影響を与えているのか、とりわけ新たなデジタルメディア空間においていかなるジェンダー/セクシュアリティ規範が形成されておられるのかに焦点を当てて検討するとともに、従来マスメディアの研究として展開されてきたジェンダーとメディア研究をソーシャルメディアが普及した現状に即したものと再構築することも目指した。

3. 研究の方法

ソーシャルメディアによって生まれた新たな社会空間におけるジェンダー規範の形成を明らかにするために、(1)性差別に対する批判的言説の形成および(2)女性のソーシャルメディア利用における主体形成を調査した。前者ではジェンダー関連の炎上事案と性差別反対を訴えた#MeToo等のデジタル・アクティビズムを取り上げた。後者では、若い女性によるソーシャルメディア利用の実態とそこに見られるジェンダー問題について、自己表象の実践に焦点を当てて調査した。研究方法としては、質的・量的社会調査の方法を採用した。1次・2次資料を対象に文献調査を行うとともに、各種報道記事、SNS投稿、ネット記事掲示板等を対象とする言説分析を行った。またソーシャルメディア利用者を対象にアンケート調査、聞き取り調査を実施した。

4. 研究成果

本研究の結果は次の3点にまとめることができる。

第一に、ソーシャルメディアによって、女性やマイノリティの人権を重視する新たな規範の強化・拡散が促されたことである。ソーシャルメディアを通じて批判的な言説空間が活性化し、ジ

エンダーに関する差別・抑圧の解消に資する議論が活発になっている。ソーシャルメディアの登場と普及によって、既存の主流メディアにおいて周縁化されてきた女性やマイノリティが自ら発信し、ジェンダーに関する言説形成において一定の影響を持つようになった。これは社会的弱者のエンパワーメントとして大きな社会的意義が認められる。

第二に、ソーシャルメディアは、先述したように、社会的弱者のエンパワーメントを促すなど、性差別の解消に資する取り組みを促す側面があるものの、他方で差別や暴力の温床にもなっていることである。ソーシャルメディアの技術は便利であるが、悪用されてもいる。コメント・ダイレクトメッセージ・画像送信等による嫌がらせ、性的画像の共有に基づく脅し、同意のない性行為の強要など、さまざまな性的被害が発生している。被害者を責める風潮もあるが、ソーシャルメディアの利用者が、なぜリスクのあるセク스팅に巻き込まれてしまうのかは、アイデンティティや承認欲求、好奇心、女性身体の(自己)モノ化など、様々な要素が絡み合っており、その社会過程は複雑である。本研究では、女性のソーシャルメディア利用者の自己表象が、しばしば自己性化・モノ化を伴っていることから、性化・モノ化に関する長年のジェンダーとメディア研究の知見をソーシャルメディアの研究に応用したが、ソーシャルメディアを通じて、この問題が現在も形を変えて再生産されていることがわかった。

第三に、従来マスメディアを基に発展してきたメディアリテラシーの概念をソーシャルメディアに対応したものに更新することの重要性である。ソーシャルメディア上では、様々な属性やイデオロギーを持つ人々が相互作用することができる。従って、ソーシャルメディアの利用者にとっては、ジェンダーを含め、様々な社会的差異やそれに基づく権力関係について学ぶことはますます重要になっている。他方で、個人の利用者にはリテラシーを求めるだけでなく、ソーシャルメディアのプラットフォーム運営企業の取り組みも不可欠である。企業の中には、コンテンツ・モデレーションに力を入れている企業もあるが、依然として有害コンテンツの作成・共有、誹謗中傷などの問題は残っている。プラットフォーム運営企業を含む様々なステイクホルダーの間の対話・協働が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 田中洋美	4. 巻 62
2. 論文標題 コミュニケーションのジェンダー問題：旧来の、そして新たな課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 女子体育	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田中洋美・高馬京子	4. 巻 87
2. 論文標題 現代日本のメディアにおけるジェンダー表象：女性誌『an・an』における女性像の変遷	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田中洋美・高橋香苗	4. 巻 20
2. 論文標題 若者によるソーシャルメディアの利用とジェンダー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 情報コミュニケーション学研究	6. 最初と最後の頁 95-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Ho Michelle H. S.、Tanaka Hiromi	4. 巻 10
2. 論文標題 How Nissin Represented Naomi Osaka: Race, Gender, and Sport in Japanese Advertising	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Communication & Sport	6. 最初と最後の頁 594 ~ 615
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/21674795211040213	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 田中洋美	4. 巻 2月
2. 論文標題 デジタルテクノロジーとジェンダー：ソーシャルメディア、データ、人工知能をめぐる権力論に向けて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『デジタル社会の多様性と創造性：ジェンダー・メディア・アート・ファッション』	6. 最初と最後の頁 153-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中洋美	4. 巻 3850
2. 論文標題 ソーシャルメディアなくして語れない現代フェミニズム：現代米国フェミニズムの多様性と創造性を伝える	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ho Michelle H. S., Tanaka Hiromi	4. 巻 9
2. 論文標題 Following Naomi Osaka and Rui Hachimura on Social Media: Silent Activism and Sport Commodification of Multiracial Japanese Athletes	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Social Media + Society	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/20563051231211858	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 2件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 田中洋美
2. 発表標題 「大会テーマ・基調講演趣旨説明：デジタルテクノロジーとジェンダー」
3. 学会等名 国際ジェンダー学会2021年大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hiromi Tanaka, Honoka Kato
2. 発表標題 Affective Politics of Digital Feminism: Complexities of Feminism in Japan's Social Media Space
3. 学会等名 IAMCR 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中洋美
2. 発表標題 デジタルテクノロジーの広がりとジェンダー変容：ソーシャルメディアの新たな可能性とリスク
3. 学会等名 国際ジェンダー学会2020年大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中洋美
2. 発表標題 メディアとジェンダーをめぐる状況の変化：研究の視点から
3. 学会等名 シンポジウム「ジェンダーを巡り変化するメディア」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中洋美
2. 発表標題 身体構築と表象
3. 学会等名 日本スポーツとジェンダー学会第18回大会・公開シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Michelle H. S. Ho、Hiromi Tanaka
2. 発表標題 Azuma Hikari, My Healing Bride: Tracing Gender and Human-machine Intimacy in Contemporary Japan
3. 学会等名 73rd Annual ICA Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中洋美
2. 発表標題 討論：繋がりと分断、そして？：ソーシャルメディアがもたらした変化と可能性
3. 学会等名 日本メディア学会2022年春季・大会シンポジウム（開催校企画）「ソーシャルメディアの日常」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Jindong Leo-Liu、Hiromi Tanaka、Michelle H. S. Ho
2. 発表標題 Comparing romantic AI companions in Japan and China: Anime fantasy, gendered embodiment, and Asian posthumans
3. 学会等名 Research Conference and Workshop on Gender, Youth, and Media in Asia, organized by GSRC/FASS, National University of Singapore (NUS) (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 高馬京子、松本健太郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 250
3. 書名 『みる／みられるのメディア論 視覚関係から考える文化の生成・越境・制御』（執筆部分：「みる／みられるのポリティクス 視線・監視・ジェンダー」）	

1. 著者名 Divya Upadhyaya Joshi, Hiromi Tanaka, Chompoonuh K. Perpoonwiwat	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Rawat Publications	5. 総ページ数 292
3. 書名 Gendered Cityscapes: Perspectives on Identity and Equity in Urban Asia (執筆部分: "Gender and Sexualization in Urban Japan: Reflections in the Media")	

1. 著者名 門林岳史・増田展大編著 (田中洋美ほか共著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 287
3. 書名 『クリティカル・ワード メディア論』 (執筆部分: 「ジェンダーとメディア」)	

1. 著者名 Qien Huang, Jing Zeng, Hiromi Tanaka, Saif Sahin (Eds.)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Sage	5. 総ページ数 -
3. 書名 Digital Visibility in Asia. A special issue (scheduled October 2024) of Convergence: The International Journal of New Media Technologies (eISSN: 17487382)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

シンガポール	National University of Singapore			
中国	Chinese University of Hong Kong			
オランダ	University of Amsterdam	Utrecht University	Groningen University	他機関